賀来飛霞の『油布嶽採薬図譜』考

荒　金　正　憲

はじめに

賀来飛霞（一八一六―一八九四）が天保十一年夏五月、油布嶽に登って採薬した『油布嶽採薬図譜』の原本は、『油布嶽採薬記』と『油布嶽採薬図譜　乾』『油布嶽採薬図譜　坤』の三冊である。[1]『油布嶽採薬記』は『油布嶽採薬図譜　乾』『油布嶽採薬図譜　坤』（以下、この二冊をあげる場合には『図譜』とよぶ）の草稿で、それには写生図を全く欠いている。『図譜』は、『油布嶽採薬記』の定稿とされるもので、巻一、巻二、巻三からなり、「紀行」「題言」と油布嶽の絶頂部、中腹部、山麓部に分けられた植物目録に続いてそれぞれ「草木写生圖」が掲載されている。これまで飛霞の著作目録等で『油布嶽採薬記』を二冊とされた場合には、定稿の『図譜』二冊を指していることが多い。

この『図譜』は、これまで多くの賀来飛霞研究に取り上げられ、植物研究の上から大分県の草分けとされ、地域植物誌の貴重な資料とされながらも、それの解題されたものは見当たらず、その内容の理解や掲載された植物の吟味検討がなされていなかった。

筆者は、別府大学平成六年度公開講座で「賀来飛霞と本草学」と題して講演した機会に『図譜』の解題を試みた。それを通して油布嶽（由布岳）採薬という実地踏査による飛霞の本草学に触れ、飛霞のひたむきな研究態度や植物誌として貴重な価値を持つ油布嶽草木誌に改めて感銘を深くした。

この考をまとめるに当たり、『油布嶽採薬記』並びに『図譜』の原本の撮影許可を頂いた安心院町教育委員会、撮影にあたって下さった県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究員段上達雄氏、文献等で多くの知見を頂いた大熊米陽氏（安心院町在住）、〆野勝教氏（安心院町教育委員会）、『図譜』の書き下しにあたり援助を賜った別府大学の友永植氏、佐藤暁氏（日出町在住）と入江秀利氏（別府市在住）、写生図の鑑定に指導を賜った初島住彦氏（鹿児島市在住）、武石千雄氏（玖珠町在住）、さらに、この報文の寄稿について格別の機会を与えて下さった学部出版委員会等各位に対し、ここに深甚の謝意を表する。

『図譜』の構成

定稿『図譜』二冊の内容構成は、次の通りである。（草稿の『油布嶽採薬記』は、草木写生図を欠いているが、定稿とほぼ同様な内容であるので、ここでは省略することにする）

（表紙）　『油布嶽採薬図譜　乾』　　大分県下宇佐郡佐田村
七十八翁錦窠題簽　　賀来飛霞

油布嶽採薬記巻一

紀行

○飛霞の定稿には「紀行」とあるが、この二文字は、帆足萬里により削除の添削を受けている。しかし、この内容を示すために、ここでは「紀行」として扱うことにする。

○「紀行」には、油布嶽の山容のこと、油布嶽採薬の経緯、登渉のコース、登渉途中で観察された油布嶽の自然環境や油布嶽周辺地の情景などが詳しく記述されている。

○「紀行」の末尾に油布嶽採薬の日時〝天保庚子夏五月〟、その後に〝賀来睦之〟とあり、登渉し採薬した睦之（飛霞）一人の名が記され、捺印されている。

題言

○「題言」は、凡例の体裁で、箇条書きに四項目に亘って述べられ、高山における草木の生態的区分（絶頂部、中腹部、山麓部）や絶頂部の生態とその植生、写生図の内容などが記されている。

○「紀行」の場合と同様に、末尾に〝睦之識〟と記されている。

油布嶽採薬記

賀来佐之公輔
賀来睦之季和　撰

絶頂部（麻比都児（マイヅル）草以下、絶頂部の四十二種類の植物名、三種類の動物名があげられ、一部に形状等が付記されている）

○冒頭に兄佐之と睦之（飛霞）の共著の形がとられいる。

○絶頂部の植物目録及び形状が記述されている。末尾には鳥や蜂などの動物も付加されている。

○動植物名は、漢名と和名とが用いられ、いずれかが不明の場合には、〝和名未詳〟または〝漢名未詳〟としている。

○和名には、本草和名（ホンゾウワミョウ）[2]を用いている。

○絶頂部草木図（〝絶頂草木圖〟の字句の後に、目録に掲げた植物四十二種類すべての図と、鳥、蜂の二図が掲載されている）

○草木図の末尾には〝賀来佐之　弟　飛霞　同撰〟と別の紙に記されてたものが貼られている。[3]

（表紙）『油布嶽採薬図譜　坤』

七十八翁錦窠題簽

油布嶽採薬記巻二

山腹部（絶頂部と重複し、絶頂部にもみられるもの十九種類と、山腹部の十一種類及び鳥一種類、計三十一類種の名があげられている）

山腹草木図（山腹部の十一類種の植物図が掲載されており、末尾に「油布嶽採薬記巻二終」の記がある）

油布嶽採薬記巻三

山麓部（絶頂及び山腹部と重複し山麓部にもみられる十三種類、山腹部と重複し山麓部にもみられる五種類、絶頂部と重複し山麓部にもみられる二種類、山麓部だけにみられる三十五種類及び鳥二種類、計五十七種類の名があげられている）

山麓草木図（山麓部にあげられた三十五種類の草木図と鳥一図が掲げられ、末尾に、〝睦之圖〟が付記され、〝大神〟〝睦之〟の印がある。終末に〝油布嶽採薬記巻三大尾〟とある）

油布嶽採薬とその前後

一、『大河内寫真符号』『水谷寫真図符号』と『図譜』

賀来飛霞が油布嶽で採薬したのは、天保十一年（一八四〇年）の陰暦五月、飛霞が二十四歳の時である。五月九日に郷里の佐田を出

発、十日に油布嶽に登渉して採薬し、十一日に佐田に帰っている。「紀行」の終末に〝明日ニ稿ヲ起コシ、油布嶽採薬記ヲ作ル〟とある。

飛霞の年譜によると[4]、油布嶽採薬の天保十一年の前には、天保五年、飛霞十八歳の時、兄佐之と上京して山本亡洋について本草学を学び、天保七年二十歳の時、阿波へ赴いている。前年の天保十年には、兄嫁を連れて琵琶湖の兄佐之の許へ行っている。

賀来飛霞関係の遺稿の中に『大河内寫真符号』と『水谷寫真図符号』の二冊のコピーが残されている。『大河内寫真符号』は、①は豊前宇佐郡福木野滝の近辺に生える草、②は僕の郷（安心院町佐田）の山中陰地に生える草、などと⑪項目まであり、⑪項は国東郡伊見浦のウロロンコをあげてある。それぞれに図を添えた鑑定依頼書の草稿である。

この草稿には図はないが、「甲ハ全形、乙ハ花弁ヲ開キ蘂ヲ見ル、丙ハ・・」などと、図の説明が付されている。『水谷寫真図符号』も同様に、①玖珠郡硫黄山絶頂向陽の地に生える雑草、カフサンスギから⑨杵築の鴨まで、それぞれ形状や図の説明が書かれている。

ここでの〝大河内〟は尾張藩の大河内存真、〝水谷〟は水谷豊文であるとされている[5]。いずれも割註に「・・今秋、弟睦之ヲシテ其ノ地ニ採草セシム」とあることから、この書簡の草稿は、兄佐之のものであって、郷里を離れて遊学していた佐之が、郷里佐田にいる弟睦之を通して腊葉標本を作らせ、実地本草学の本家といわれた大河内存真や水谷豊文に書簡を添えて送り、正確な動植物名の鑑定を依頼したものである。

飛霞の〝天保壬辰（三年）秋〟の草木写生図の目録に、玖珠郡硫黄山産のカフサンスギ（マンネンスギ）があるが、これは『水谷寫真図符号』①のカフサンスギと符合しており、これらの書簡の草稿は、油布嶽採薬記を作る以前のものであると推測できる。また、この草木写生図の目録には、九重火山の硫黄山（玖珠郡田野）のイワカガミや油布嶽山麓の油布院（由布院）の草木写生図があげられており、油布嶽採薬以前に、油布嶽のような高山では[6]、すでに、生態的に絶頂部や山腹部、山麓部などに分けられ、その植物分布が異なることを予想し、「紀行」に〝予、登リテ採薬スルヲ欲スルハ有年〟とあるように、それを実証する機会を待ち望んでいたものと思われる。

二、油布嶽採薬における兄佐之と飛霞

草稿『油布嶽採薬記』の表紙には、〝賀来佐之公輔、弟　睦之季和撰〟とあるが、「草木誌序」の末尾には、〝賀来睦之記〟とあり、さらに、「題言」の末尾にも、〝登嶽後九日睦之識〟とある[7]。それが「油布嶽草木誌」と記された植物目録には、〝北豊　賀来佐之公輔、弟睦之季和　撰〟と、兄佐之と飛霞の共著の形がとられている。

定稿の『図譜』では、『図譜　乾』の「紀行」の末尾に〝賀来睦之〟とあり〝睦之〟の朱印が押され、「題言」（草稿の「草木誌」にあたる）には〝睦之識〟と記されている。それが、植物目録のある「油布嶽採薬記」の巻頭には〝賀来佐之公輔、弟　睦之季和撰〟と記載され、『図譜　坤』の終末「油布嶽採薬記巻三大尾」の欄に、〝睦之圖〟と認められ、捺印されている。

これらのことから、『図譜』の「紀行」「題言」は勿論、「草木写生圖」も飛霞の作るところであって、そこでは〝睦之〟一人の名が記されている。それが植物目録の記載になると、兄佐之と同撰の形をとっているのである。前述の『大河内寫真符号』などから分かるように、植物名の鑑定には佐之が深く関わっており、飛霞が兄佐之に対し絶大な敬意を表したためであろうと推測する。

これらの記名とは別に、定稿『図譜　乾』の表紙に〝賀来飛霞〟、末尾に〝賀来佐之　弟　飛霞　同撰〟と、〝飛霞〟の号を用いて、そ

れぞれ異なる紙に書いたものが添付されている。これらは何かの理由で後で添付されたものであろう。

三、萬里の朱筆

兄佐之（飛霞より十七歳年上）は十四歳で、飛霞は五歳の時に帆足萬里に入門し、萬里に師事して医学や漢詩、本草学などを学んだ。本草学に没頭するようになっても、兄弟は何かにつけて萬里の指導を仰いでいる。飛霞の研究を続けてこられた大隈米陽氏により、『図譜　坤』の見返しに、〃朱字添作ハ萬里先生ノ直筆ナリ。表箋ハ伊藤圭介男ノ直筆ナリ〃と認めた紙片が貼られてある。

萬里の朱筆は、草稿の『油布嶽採薬記』にも、定稿の『図譜』にも及んでいる。例えば、草稿の筆頭に書かれた〃油布嶽草木誌序〃は、〃紀行〃と添削され、「題言」の前に書かれた〃油布嶽草木誌〃も〃油布嶽採薬記〃と添削されている。それがさらに、線が引かれて抹消されている。そして文中にも多くの添削がみられる。『図譜』はこの添削を取り入れてすべてを清書されて定稿に至ったもようである。[8] 定稿で〃紀行〃と書かれた箇所も、さらに〃紀行〃の部分が添削されるなど、定稿にも所々に朱書きが施され、また、草木写生図の植物名で、横書きになっているものは縦書きに書き改められている。こうして添削された『図譜』の朱書きは、訂正されないでそのままになっている。

しかし、定稿『図譜』の植物名の頭に付けられた○印や、和名に送られた振り仮名は、萬里の朱書きとは字体も色調も異なっており、後で飛霞本人か、或いは山本亡洋かが加筆したものであろう。

四、『図譜』の表箋について

当時、本草学の第一人者であった伊藤圭介と飛霞とは、本草学を通し早くから深く交流していた。『図譜』の「題言」にあるように、高山に生える草木を三等に分けることについても〃我ガ友、尾藩伊藤氏ノ嘗テ木曽御嶽ガ草木ヲ区別スルニ倣フナリ〃とあり、この時既に、圭介の用いた高山における生態的区分の考えを導入している。飛霞が六十二歳で東京の小石川植物園調査係として研究に勤しむようになったのも伊藤圭介の招きによるものであった。

『図譜』のいずれの表箋も伊藤圭介が書かれたもので、表箋の左側下に〃七十八翁錦窠題簽〃と付記されている。〃錦窠〃は圭介の老年の号で、圭介が七十八歳の時、定稿の油布嶽採薬記巻一に『油布嶽採薬図譜　乾』、巻二、巻三をまとめた一冊に『油布嶽採薬図譜　坤』としたのである。圭介七十八歳の時は明治十三年、飛霞が東京に出て三年目、飛霞が一旦帰郷して再び上京した年である。推測ではあるが、この年、飛霞にとって至宝とされる油布嶽採薬記の定稿を持参し、圭介の目に入れたのではないかと想像する。この年は、圭介と共編の『小石川植物園草木図説第一冊』が刊行される前年であり、油布嶽採薬記が記された天保十一年からは四〇年を経過している。

このことについては、高橋正和氏の「忘れられた科学者（三）」で詳しく述べられている。この中で、高橋氏は「記」と「図譜」のことに触れられ「図譜」の完成で圭介により命名されたとされている。筆者は「紀行」「題言」の内容及び生態的に扱われた植物目録、それに「草木図」がセットされており、「記」と「図譜」とは一体的なものとして扱われていると解する。それによって、植物種の正確な鑑定が可能となり、地域植物相研究の重要な資料性を持つもので、画を心得た飛霞のみがなし得た、当時では異彩な採薬記（植物誌）であったものと価値づける。

明治十五年春、上野不忍池院で圭介八十歳の祝賀会が催され、盛大な展覧会がもたれた。その際の出品目録に飛霞のものが記録されている。[9] それには『油布嶽採薬記』二冊（写本）とあり、それは圭

介が表箋を付した定稿の『図譜』とは別のものと思われるが、今のところ、どのようなものか確認できていない。

『図譜』の植物誌的研究

一、油布嶽採薬の日程、コース等

飛霞は、宿願であった油布嶽採薬を天保十一年五月（陰暦）に導者と二人で登渉し、実地に採集観察した。『図譜』の「紀行」にみられる日程やコース及び主な観察事項等（○印）は、次の通りである。

九日　佐田（安心院町）を出発 → 湯山（別府市）→ 塚原温泉（湯布院町）→ 塚原（湯布院町）〈泊〉

○村（塚原）の自然環境

十日　塚原 → 山の東から登る（塚原道）→ 大渓（現在の〝おおくえ〟）→ 中峯（西岳）の近く → 中峯（西岳）→ 北峯（飯盛山）へ → 一老杉（池代ノ杉）・池（池代）→〈路を失う〉〜〈陽の向かう地に出て食事〉→ 西に下る → 転石の多い急坂を下る → 平らな山麓 → 宮道 → 舎（塚原）→ 塚原温泉〈泊〉

○大渓の山崩れの様子

○中峯近くの山石の様子と鶴見岳や四極山（高崎山）などの展望

○南峯（東岳　一五八三メートル）の絶険の模様

○中岳（西岳　一五〇〇メートル）の雑木の形状や油布一郷の景色

○池代の老杉や湿地、奇石怪巌にツツジの生える様子

○中腹の転石で危険な急坂の情景

十一日　塚原温泉 → 塚原 → 佐田

○明日に稿を起こす

＊地名などは『由布登山地図』木村好兵衛著（大正十四年八月十六日発行）を参照した。

二、油布嶽採薬時の植物観察や記録、標本の作成

『図譜』の「紀行」「題言」にみられる植物には次のものがある。

○大渓でのセリ

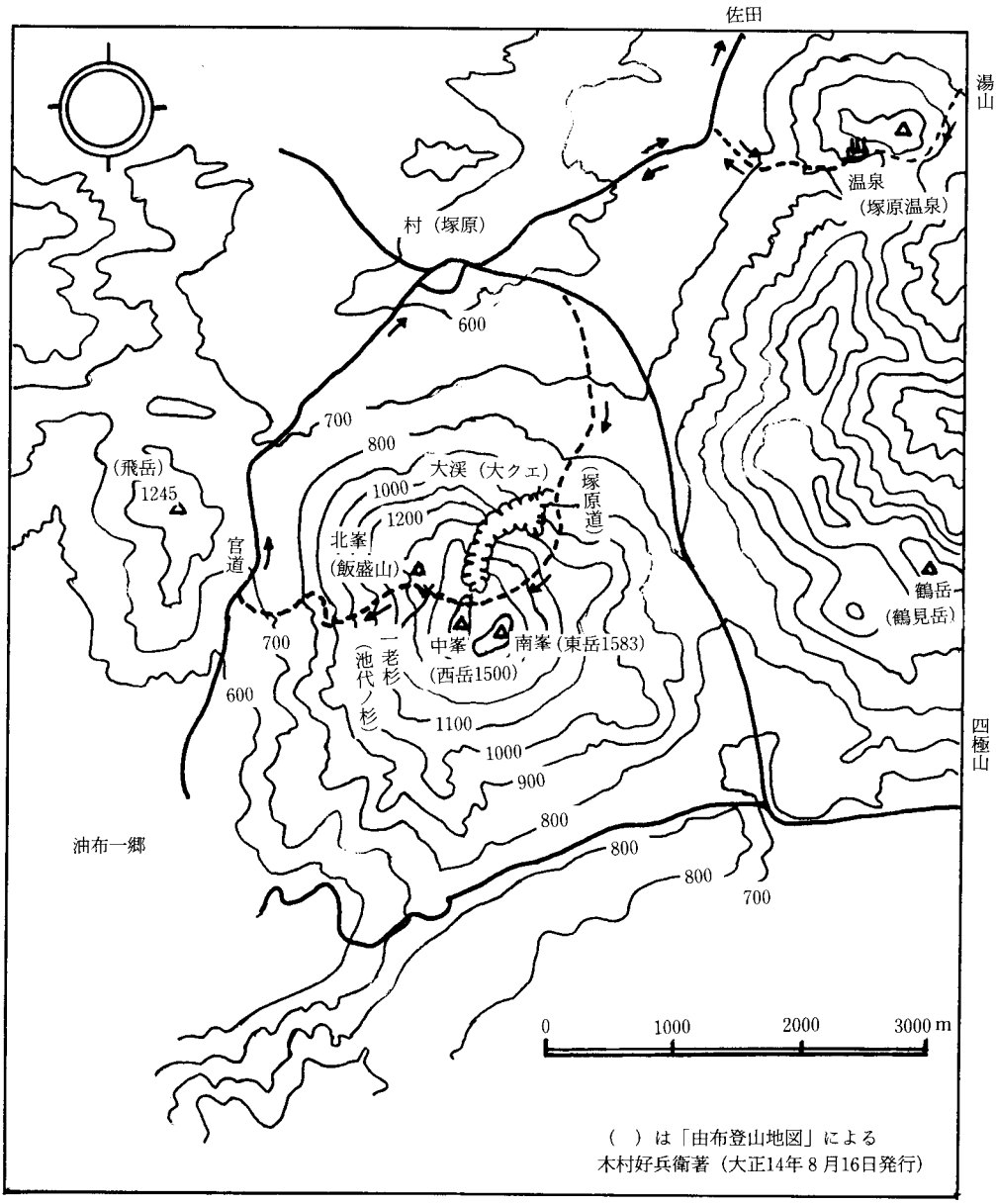
○北峯のスギ、バイケイソウ、オタカラコウ、ニシノヤマタイミンガサ、ミヤマキリシマ

○半腹以下　ヤマシャクヤク、トチバニンジン

これらは、採薬記の植物の極く一部であって、スギ、セリ、ヤマシャクヤク、トチバニンジンは目録に掲載されていないが、油布嶽の植物目録は、これらを含めて記録され、写生されたものであろう。草稿を作るためには、現地でのメモが必要である。いわゆる観察メモ書き（野帳）である。飛霞の遺稿の中には、油布嶽採薬の際のメモ書きは残されていないが、『杵築採薬記』（嘉永五年）でのメモ書きがある。それには、一枚の和紙に墨で、植物名が片仮名や漢字で無造作に書かれ、植物のスケッチや日付もみられる。紙の大きさも様々である。

油布嶽嶽採の場合も同様に観察メモがとられ、現地での草木のスケッチもなされたものであろう。飛霞は最初から、記録された植物全ての写生図を画くことを考えていたと想像される。また、必要に応じて植物も採集したであろう。「紀行」のなかには、採集用具や採集した記録はないが、種名未詳のものや図譜を必要とするものは、その都度採集して押し葉にするか、籠などに入れるかして家まで持ち帰り、後で、スケッチしたり、調べて鑑定に供したりしたものであろう。五月十日の一日だけの強行登渉で、現地で観察やスケッチをすべて為し終えることは極めて困難なことである。

宮崎県総合博物館所蔵の飛霞の腊葉標本の中に、天女花オホヤマレンゲがある。それには〝油布嶽ニ採ル〟のメモ書きが添付されている。この標本は、まさしく、天保五年（一八四〇年）五月十日（陰暦）に油布嶽絶頂で採集されたものである。メモ書きには〝山本翁


佐田
湯山
温泉
(塚原温泉)
村(塚原)
600
700
800
(飛岳)
1245
大渓(大クエ)
1000
1200
(塚原道)
官道
北峯
(飯盛山)
鶴岳
(鶴見岳)
700
一老杉
(池代ノ杉)
中峯
南峯(東岳1583)
(西岳1500)
600
1100
1000
900
四極山
油布一郷
800
800
800
700
0
1000
2000
3000 m
( )は「由布登山地図」による
木村好兵衛著(大正14年8月16日発行)

油布嶽採薬のコース

オオヤマレンゲ
油布嶽－天保11年（1840）
（宮崎県総合博物館所蔵腊葉標本）

鑑定〃とあり、京都で師事した山本亡洋の鑑定を得ているのである。この天女花オホヤマレンゲは、草稿の『油布嶽採薬記』では、〃和名法納幾（ホウノキ）〃とし、〃其ノ枝屈曲シ、葉小サシ〃とホオノキとは少し異なる形状を観察し記載されている。それが定稿では〃和名阿々也末連花〃と改められているのである。このことからも、飛霞の観察力の鋭さや、標本作成を通して正確を期した研究態度が伺える。また、『図譜』には、〃方有花〃〃方有蕾〃と付したものや、観察された葉や根の形状が傍書されており、メモ書きには、さらに細やかな観察が記録されていたに違いない。

三、植物の鑑定

野外に出て採薬するようになると、採薬に供する植物だけでなく、様々な植物に当面し、従来の古典的な本草学では通用しなくなる。したがって、『大河内寫真符号』や『水谷寫真符号』のように、未詳の植物の写生図や標本を添えて、幅広く精通した本草学者に鑑定を依頼したのである。兄佐之は、伊藤圭介と共に長崎でシーボルトから指導を受けている。佐之は、若いときの飛霞にとっては、本草学の直接の先達者であったと思われる。『図譜』にあげられた植物名で、〃和名〃が書かれ、〃漢名未詳〃のものや、漢名〃○○一種〃とあるものは、中国からの本草学を越えようとしたものであって、『図譜』であげられた植物のうち四十五種類が数えられる。また、シダ植物のフジシダを〃ポレイポヂウム〃、コイワカンスゲを〃ガラス〃とし、その補足に〃西洋本草家ノ統ノ名トスル。今仮ニ之ヲ用ユ〃とあり、植物名にリンネの分類や洋学の影響を垣間みることができる。

あげられた八十八種類の植物のうち、和漢名未詳のものは、ポレイポヂウム、ガラス、モミジ一種のほか、和漢名未詳とされたミヤマザクラとキスゲの五種類である。絶頂部に群生するミヤマキリシマについても、山躑躅としながらも、〃極メテ短矮ニシテ、石上ニ生エル者ハ、花ノ深紅・浅紅ノ二種有リ〃と記され、この時既に、ヤマツツジとは区別しているのである。これらの鑑定には、兄佐之の力量が大きく関わったと思われるが、豊前佐田にあって、尾張藩の本草学者大河内存真、水谷豊文並びに伊藤圭介、京都の山本亡洋などの当時卓越した本草学者と交流してこそ、これほどの正確な植物目録を作成することができたのである。[10]

四、目録の整理

『図譜』の特色は、植物目録を絶頂部、中腹部、山麓部に分けてまとめられていることである。絶頂部に四十五種類（内動物三種類）、山腹部に三十一種類（内、絶頂部にみられるもの十九種類、鳥一種類）、山麓部には五十七種類（内、絶頂部及び山腹部にみられるもの十三種類、山腹部にみられるもの五種類、絶頂部にみられるもの二種類、鳥二種類）に整理されている。草稿をみると、絶頂部のものは尽くあげられているが、中腹部、山麓部にあげられたものの中で、他の分布帯と重複するものには番号を付し、それが『図譜』の目録では〃絶頂部にみられるもの〃などと区別されてまとめられている。

由布岳のような新しい火山での、複雑な分布状況にある植物分布を見事な手法で整理しているのである。しかも、飛霞は予め、このことを予期して観察がなされ記録されているように思われる。これら三等に分けられたの植物群から、絶頂部では、主として山頂帯風衝地の岩場に発達する低木林、山腹部は低木林と草原とが混交した植生、山麓部は湿地を含めた草原や林縁など、ほぼ、それらの植物群落や生育環境が推測される。

『図譜』で扱われた植物は、重複してあげたものを除くと、絶頂部四十二種類、中腹部十一種類、山麓部三十五種類、計八十八種類となる。これは油布嶽に生育する維管束植物（シダ植物、種子植物）の全てではないが、由布岳を特色づけるものが多く、また、フジシダ、フクジュソウ、ヤマオダマキ、ツチグリ、サクラソウ、ムラサキ、ツシママコナなど、由布岳での希産種も多く扱われ、現在なお活用される貴重な地方植物誌といって過言ではない。

五、「草木写生図」の作成

『図譜』であげられた八十八種類の植物が、〃絶頂草木圖〃〃山腹草木圖〃〃山麓草木圖〃の見出しで、それぞれの目録の後に全ての草木図が掲げられている。それには漢名や和名が書かれ、「題言」に〃予ガ遊セシ時、花実ノ候ニ非ラズ、而ルニ之ヲ画クハ、旧図ヲ臨スルナリ〃などと、油布嶽採薬の際、描いたものに、かつて写生した当該植物の花や実の図を補っている。

飛霞は十四歳の時、杵築藩の十市石谷に画を学び、精細に写生し、彩色した草木写生図を多く描いている。飛霞が七歳から十四・五歳頃までのものをまとめた「本草画帖（琅玕帖）」があり、天保二年（十六歳）から天保十一年に油布嶽採薬する頃には、郷里の佐田や近郊の油布院、九重山などでの草木写生図が多くみられる。これらの写生図の中から、『図譜』の写生図に〃臨舊圖〃と明示して補塡したものであろう。丹念に仕上げた彩色写生図に比べると、『図譜』の写生図は、「題言」に〃略図ヲ作ル〃とあるように、単色墨画のスケッチ風で、飛霞にとって十分なものではなかったと推測する。

おわりに

飛霞は当初、草稿『油布嶽採薬記』の巻頭に〃油布嶽草木誌序〃と記してある。今日風でいえば、〃油布嶽植物誌〃である。生態的な分布で整理された写生図入りの植物誌といえる。筆者らが刊行した『新版大分県植物誌』の「大分県植物研究史」の冒頭に〃本草学者賀来飛霞〃を掲げ、本県植物研究の草分けとして特筆している。郷土の〃油布嶽植物誌〃としての学術的価値は極めて大きい。今回、『図譜』の内容に立ち入ってみると、一層その感を強くする。

本年七月二十六日、宮崎県総合博物館で所蔵されている飛霞の標本中、油布嶽採薬時の、百五十四年前に採集された〃天女花オホヤマレンゲ〃に接したときは感慨一入であった。

『図譜』の草稿や定稿に付加された植物名の朱書きのこと、圭介八十歳の記念展示会に出品された『油布嶽採薬記』二冊（写本）のこと、いずれかで保管されているであろう油布嶽採薬に関わる未見の採集植物標本や草木写生図のこと、それらの検索や検証など油布嶽採薬の細やかな研究はこれからのようである。

文　献

＊刊行年代順に掲載

○賀来佐之　年代未詳（一八三二・天保三年前後）大河内寫真符号
○賀来佐之　年代未詳（一八三二・天保三年前後）水谷寫真符号
○賀来佐之・賀来睦之　一八四〇（天保十一年）『油布嶽採薬図譜　乾』『油布

嶽採薬　坤』
○賀来佐之・賀来睦之　一八四〇（天保十一年）『油布嶽採薬記』
○大隈米陽編　一九五二（昭和二十七年）　賀来飛霞関係分　豊前国佐田郷土史上巻
○大隈米陽編　一九五四（昭和二十九年）　賀来飛霞関係分　宇佐山郷先達伝全
○別府大学図書館　一九七三（昭和四十八年）　大分県動植物文献目録付大分県内所蔵明治以前の動植物文献写真集（関係分）大分県に関する資料目録　二別府大学図書館叢書　二
○大分県宇佐郡安心院町安心院町教育委員会　一九七六（昭和五十一年）　賀来飛霞遺稿集　一　（大分県関係分）『油布嶽採薬図譜　乾』『油布嶽採薬　坤』（関係部分複写）
○山下愛子　一九七七（昭和五十五年）　賀来飛霞　―資料編―　東京時代　女子聖学校短期大学紀要　第九号
○大分県教育委員会　一九七八（昭和五十三年）　賀来飛霞の分　郷土の先覚者シリーズ　第八集
○高浦照明　一九七八（昭和五十三年）　大分の医療史　三大本草家・賀来飛霞
○高橋正和　忘れられた科学者（三）―賀来飛霞―
○大分県安心院町教育委員会　一九八六（昭和六十一年）　賀来飛霞関係資料調査報告書
○大分県植物誌刊行会一九八六（平成元年）　新版大分県植物誌　賀来飛霞植物写生図　大分県植物研究史
○安心院町・安心院町教育委員会・安心院町文化協会　一九八九（平成元年）　賀来飛霞略年譜　没後百年賀来飛霞遺品展

注

(1) 賀来飛霞関係資料（『油布嶽採薬記』『図譜』を含む）は、安心院町教育委員会が所有者との間で管理委託契約を結び、『賀来飛霞関係資料調査報告書』大分県安心院町教育委員会（昭和六十一年）の「目録」に掲載された資料は、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館に委託・保管されている。

(2) 本草和名（輔仁本草）が用いられている。

(3) 年譜によると、賀来睦之が〝飛霞〟と号したのは、弘化二年、三十歳の時である。

(4) ここでは、安心院町等が主催した「没後一〇〇年賀来飛霞遺品展」の略年譜を用いた。

(5) 共に尾張藩の本草学者。大河内存真は伊藤圭介の実兄。水谷豊文は小野蘭山門下の逸才で、尾張本草学の指導者。

(6) 飛霞の住んでいた佐田（安心院町）から由布岳をみると、その山容は抜きんでており、特にその絶頂部の絶険が眺望できる。

(7) 草稿『油布嶽採薬記』の「油布嶽草木誌」の末尾に〝登嶽後九日陸之識〟とあり、草稿の完成は天保十一年五月（陰暦）二十日と考えられる。

(8) 定稿の字筆は、兄佐之のものに似ているともいわれている。

(9) 山下愛子氏の『賀来飛霞―資料編―』（一九七七）によると、この目録は「錦窠翁耋筵会書目解題（写）」全一冊（国会図特七―二〇三）。

(10) 当時使われていた植物和名には、現在のものと異なっているものがある。

『図譜』の書き下し[1]

（表紙）　油布嶽採薬図譜　乾

七十八翁錦窠題簽

大分県下宇佐郡佐田村
賀来飛霞

油布嶽採薬記巻一[2]

油布嶽ハ南豊ノ高山ナリ。我ガ北豊ノ彦嶽[3]ト相頡抗ス。而シテ彦嶽ハ人皆之ニ登ルモ、独リ布嶽[4]ノミ、之ニ登ル者甚ダ少シ。蓋シ絶険ニシテ、且ツ寺院ノ宿ルベキ無キヲ以テスルナリ。其ノ山、周匝十有八里、高キハ之ヲ三峯ト称シ、宛然トシテ芙蓉ノ如シ。故ニ呼ビテ豊ノ芙蓉ト曰フ。雲霧ヲ呑吐シ、風雨雷ヲ噴起ス。四国、中州ヨリ之ヲ望マバ、遠ク雲際ニ秀イデ、実ニ豊ノ名山ナリ。予、登リテ採薬セントスルコト有年。而シテ土人、毎歳、上巳[5]、端午[6]二日ヲ以テ登陟ノ期ト為ス。数バ其ノ下ヲ過ルモ、未ダ嘗テ其ノ期ニ会サズ。故ニ我ガ郷ヲ距ツルコト甚ダ遠カラザルト雖ドモ、未ダ登ルヲ得ザルナリ。去歳、塚原温泉ニ浴シ、土人ト明春ヲ以テ、予ノ登ルヲ導ビクヲ約ス。今春、伯父ガ喪ニ居リ、仲夏[7]ニ及ビテ同遊ノ者ヲ求ム。葛城生[8]従フヲ請フモ、病モテ果サズ。予、意ヲ決シテ、九日ヲ以テ独リ発シ、湯山ニ至ル。温泉[9]ニ浴シ、日晡山ヲ下リ、約スル所ノ土人ノ家ニ宿ル。農務ノ急ナルヲ以テ辞スモ、之ヲ強ルニ乃チ諾ス。村[10]ハ嶽陰ニ在リ。地勢頗ル高ク、緑陰蓊欝タリ。嵐気清涼ニシテ、炎熱ヲ知ラズ。杜鵑[11]多シ。夜ハ蚊ノ声ヲ聞カズ、唯、筧水ノ涓々トシテ声有ルヲ聞クノミ。

十日朝、快晴。導者鎌ヲ帯ビ杖を拄キテ、山東自リ登ル。朝露草棘ヲ厭浥ス。腰ヲ没シテ行クコト里許リ、右ノカタ折レテ渓ヲ渡ル。其ノ源ヲ仰望スルニ、源ハ山頂ニ発ス。蓋シ往歳山崩レ、其ノ痕大渓[13]ト為ルナリ。巨石甚ダ多ク、渓径数十歩。清激声有リテ、水中ニ芹ヲ生ズ。芳脆ニシテ甚ダ美ナリ。実ニ其ノ地ノ名産為リ。山上ノ積雪、暮春ニ及ビテ融解シ、泉源大イニ漲ル。巖石ヲ落シテ向ハシメ、殷声地ヲ動カス。登ルコト里許リ、左ノカタ折レ、又渓ヲ渡ル。登リテ之ヨリ久シク、蹊稍ヤ微ニシテ、草始メテ短シ。蓋シ是ヨリ先十余年、土人炭ヲ製セシ時、往来シテ蹊ヲ成スモ、蹊此ニ尽ク。往々陥處有リテ、其ノ間相距ツルコト数十歩。深サ脚ヲ没シ、広サ数尺ナリ。其ノ土ノ黒壌ナルヲ視ル。蓋シ山石ノ転ビテ落下シ、撃チテ坎ヲ成セシカ。或ハ大石ニ觸レ、之ヲ砕キシカ。之ヲ念ハバ人ヲシテ股栗シ止マザラシム。

豊北ノ諸山、尽ク見ユ。其ノ頂ノ大ナルハ屋楼ノ如ク、小ナルハ丘垤ノ如シ。近キハ呼ブ可ク、遠キハ拝スベシ。宛モ波濤ノ大島ヲ透ルガ如シ。鶴岳[14]ノ頂ヲ臨ムニ、甚ダ広大ニシテ、青緑綿亘ス。四極山[15]ハ亦タ甚ダ卑クシ。漸ク登リテ中峯[16]ニ近ヅキ、南峯[17]ヲ望ム。峯ハ三峯ノ中ニ在リテ最モ高シ。雑木濛密トシテ織ルガ如ク、野火モ焼ク能ハズ。巖石畳累シ、絶険ノ岨ニシテ登ルベカラズ。猟夫、田犬モ敢テ入ラズ。相伝フルニ、之ニ登ル者終ニ還ラズト。峯下ノ土石ノ崩壊セル處、雲霧忽然トシテ脚下ニ生ジ、咫尺晦冥ナリ。風起リテ笠ヲ落ス。食頃ニシテ風静マリ雲歛ル。

進ミテ中峯ニ至ル。亦タ巖石ノ高サ数十尋ニ聳エ、磊落重畳シ、勢ヒ頽落セントス。石間ノ雑木ハ、風雪ノ厭スル所ト爲リ、短矮ニシテ長ゼズ、屈曲盤蟠ス。朽幹枯條ハ、或ハ直ニ或ハ曲リ、或ハ横タワリ或ハ斜メニ、或ハ偃レ或ハ臥ス。其ノ色蒼白ニシテ、蜒然トシテ竜蛇ノ枯骨ノ如シ。蓋シ数百歳ノ物ナリ。巖下ニ休ミ、壺漿ヲ飲ミテ渇キヲ療ス。北方ノ陰雲望ムヲ遮リ、西麓ノ油布一郷[18]ノ人家、歴々トシテ数フ可シ。黄雲畝地ニ満チ、寒ニシテ未ダ麦ヲ収メザルナリ。其ノ間ノ粉ヲ點ズルガ如キハ、蓋シ外家日野氏[19]ノ家墻ナランカ。

下リテ北峯[20]ニ至ル。峯ハ中南二峯ニ比シテ最モ卑シ。雑木欝蒼トシテ、一老杉[21]ノ林表ニ秀出シ、蒼翠滴ラントスルモノ有リ。導者曰ク、

其ノ下ハ所謂池窩[22]是レナリト。林下ノ谷ヲ穿ツコト数百歩、獣跡ヲ踏ミテ以テ幽邃ニ入ラバ日ヲ見ズ。陰霧衣ヲ濡シ、頓ニ寒冷ヲ覚ユ。杉下ニ至レバ、其ノ地ハ沮洳ニシテ、唯ダ泥菖[23]ヲ生ズルノミニシテ、他ノ水草無シ。巌石ハ往々其ノ中ニ峙チ、雑木及ビ躑躅[24]ノ之ヲ蒙ヒテ、一ツニ仮山ノ如シ。水ハ浅濁ニシテ飲ムニ堪ヘズ。林中、葱管藜蘆[25]、蹋加刺哥[26]、鬼督郵[27]ヲ生ズルノミ。皆、長大ニシテ腰ニ及ベリ。鳲鳩[28]甚ダ多ク、鳴声相応ズ。時ニ加失杜利[29]ヲ見ルノミ。導者出路ヲ失イ、巌ヲ攀ジ枝ニ援リテ、漸ク向陽ノ地ニ出ズ。豁然トシテ始メテ日光ヲ見ル。奇石怪巌羅立シ、無数ノ躑躅其ノ上ニ布ス。極メテ短矮ニシテ、高サ寸許リニ過ギズ。花ノ色ハ深キモノ有リ、浅キモノ有リ。深キモノハ緋ノ如ク、浅キモノハ絳ノ如シ。熳爛トシテ錦繡ノ如シ。遊蜂ノ其ノ間ニ群飛スルハ、蓋シ卵山上ニ生メバナラン。巌石ノ幽雅、花木ノ艶麗ハ、人間ノ未ダ有ラザル所ナリ。数百歩ノ内、皆然リ。縦覧スルコト之ヨリ久シ。登陟ノ労、脱然トシテ洗フガ如シ。

休ミテ食シ、西由リ下ルニ、険危初メニ倍ス。巌石甚ダ多ク、其ノ転落シテ半腹ニ布満スルモノ、誤リテ之ヲ踏マバ即チ脱落シ、甚ダ危フシ。試ミニ一石ヲ推シテ之ヲ落スニ、石ニ触レ益マス激シ、勢ヒ砲ヲ発スルガ如シ。沙石飛揚シ、烟霧ヲ起スガ状ノ如シ。導者、誤リテ足ヲ失シ、転落シ止ム可カラズ。予、遽ニ之ヲ救ハントシ、草ニ援リ急ギ下ルモ、蹇者ガ行状ノ如ク、及ブ能ハズ。其ノ人幸ニ叢中ニ止ル。未ダ起ルニ及バズシテ大イニ笑フ。予、哭ヲ為スヲ以テ、大呼シテ之ヲ問フニ、曰ク、自ラ足ヲ失スルヲ笑フノミト。予ガ意始メテ安ンジ、相扶持スルニ、下草肩ニ及ブ。山麓、地勢漸ク平ニシテ、終ニ官道ニ出ズ。舎ニ帰リ、酒ヲ沽ヒテ之ヲ労ラフ。日晡再ビ温泉ニ浴シ、遂ニ客舎ニ宿ル。

十一日朝。晴ル。浴スルヲ謹シミ、又嚮民[30]ノ舎ニ至リ、帰ルヲ告グ。哺后家ニ帰ル。明日、稿ヲ起コシ、油布嶽採薬記ヲ作リ、草木ノ概略ヲ記ス。宿志ヲ遂ルヲ喜ビ、以テ同好ノ士ニ告グ。

天保庚子夏五月　　賀来睦之　印（睦之）

題　言

一、草木ノ高山ニ生ズルモノハ、分チテ三等ト為ス。我ガ友、尾藩伊藤氏[31]ノ嘗テ木曽御嶽ガ草木ヲ区別スルニ倣フナリ。而シテ載堯[32]、蓋シ西洋窮理ノ説ヲ原トスルナリ。凡ソ草木ノ高山ニ生ズルモノハ、山麓、山腹及ビ其ノ頂キ、判然トシテ自ラ別ル。然レドモ麓ヨリ頂キニ至ルマデ共ニ生ズルモノ、亦タ往々之有リ。此ノ編ノ載スル所ノ艾[33]、梫木[34]等ノ如キハ是ナリ。二物ハ近郊及ビ諸山モ亦タ多ク生ズ。今之ニ記スハ、其ノ実ヲ失ハザラントスレバナリ。唯、其ノ絶頂ニ生ズルモノハ、則チ僅々トシテ数フ可シ。故ニ尽ク之ヲ記ス。半腹以下ニ至リテハ、則チ啻ダ其ノ一、二ノ目撃スル所ヲ記スノミ。艸芍薬[35]、土参[36]ノ如キモ、亦タ嶽上ノ産スル所ナルモ、人家往々之ヲ栽ユ。而レドモ予未ダ之ヲ見ズ。然レバ則チ布嶽之レ高大、産スル所此ニ止ドマラズ。豈ニ一朝ニシテ之ヲ尽スヲ得ンヤ。他日將ニ之ヲ補ハン。

一、絶頂ノ艸木、風雪ノ厭スル所ト為リ、短矮ニシテ長ズル能ハザルモノ多シ。皆其ノ下ニ註ス。其ノ註サザルモノハ、能ク風雪ニ堪ヘ、天性ヲ全ウスルモノナリ。方ニ花サクハ世間ニ比シテ二月許リ遅シ。其ノ地高寒ノ故ヲ以テスレバナリ。

一、毎條略図ヲ作スハ、形状ヲ記サザル所以ナリ。偶マ之ヲ記スモ亦タ僅々ナルノミ。畫筆草々ナルモ、亦タ其ノ彷彿ヲ想見ス可キナリ。

一、予ガ遊セシ時、花実ノ候ニ非ラズ、而ルニ之ヲ画クハ、旧図ヲ臨スルナリ。故ニ傍ラニ臨舊圖ノ三字ヲ書ス。或ハ蔵スル所ノ花腊ヲ写スモノ有リ。或ハ想像シテ之ヲ画クモノ有リ。皆其ノ下ニ註ス。

睦之識

油布嶽採薬記

賀来佐之公輔
賀来睦之季和　撰

絶頂部

○麻比都児草（まいづるそう）[37] 漢名未詳
根蔓ハ土中ニ延ビ、一葉ヲ抽ク。薛草ニ似テ小サク、地ニ布シテ茎ヲ抽ク。長サ一二寸ナリ。二三葉互生ス。方ニ、四弁ノ小白花ヲ開ク。花謝ミ実ヲ結ビ、秋ニ入リ紅熟ス。大キサハ小豆ノ如シ。深秋ニ苗ハ枯ル。

○楼斗菜　和名阿篤麻幾（やまおだまき）
苗ハ短ク小ニシテ、方ニ青紫色ノ花ヲ開ク。
〈注〉図及び注は栽培種のオダマキ。由布岳山頂付近ではヤマオダマキが自生する。[38]

○石龍胆　和名波児林拕（ふでりんどう）
葉ハ極メテ短小ニシテ、方ニ花有リ。
〈注〉和名はハルリンドウとあるが、図はフデリンドウ。

○倒掛草一種　倒掛草　和名伊奴哇刺昆（ししがしら）
根ハ地上ニ露ワレ、磊柯状ニシテ鉄蕉ノ如シ。大サ拳ニ似テ、直立セズ。方ニ新葉ヲ生ズ。
〈注〉図は林内や林縁に生えるシシガシラと想像される。

○多加刺哥（おたからこう）　漢名未詳
其ノ葉ハ極小ノ者。■図[39]　花　臨舊圖
〈注〉図はオタカラコウ。

○葱管藜蘆　和名抜伊結伊草（ばいけいそう）

○鬼督郵　和名波倔麻（にしのやまたいみんがさ）
〈注〉図はニシノヤマタイミンガサ。林内に群生する。

○粉條児菜　和名猩々抜加麻（つくししょうじょうばかま）
〈注〉由布岳などでは、ツクシショウジョウバカマを産する。

○不苦阿々草（ふくおうそう）　漢名未詳 ■図　花　臨舊圖

○納吉蘭（のぎらん）　漢名未詳 ■図　花　臨舊圖

○菴蘭　和名伊奴沃木吉（ひろはやまよもぎ）
葉ハ厚ク、背ノ白色ノ者。
〈注〉図はヒロハヤマヨモギ。由布岳の草原や林縁に群生する。

○細葉也麻勃苦知（ほくちあざみ）　漢名未詳 ■図　花　所蔵ノ花腊ヲ写ス。
〈注〉図はホクチアザミ。

○艾　和名沃木吉（よもぎ）

○薇　和名宣麻伊（ぜんまい）

○比護尼多（きおん）　漢名未詳 ■図　花　臨舊圖
〈注〉図はキオンとみられる。

○邪蒿一種　邪蒿　和名伊吹防風（つくしぜり）　■図　方言山人参
花　臨舊圖
〈注〉図はツクシゼリ。由布岳山頂付近岩場に生育している。

○沃都抜容喜納失多一種（いわねこのめそう）　漢名未詳　二葉ノ者。
〈注〉図はイワネコノメソウ。

○泥菖　和名菖蒲（しょうぶ）
〈注〉図は、サトイモ科のショウブ。池代には今でもショウブが自生している。

○伊哇加瓦密（いわかがみ）　漢名未詳　方ニ花有リ。

○紫花地丁一種　和名失魯斯密例（こみやますみれ）　方ニ花有リ。
〈注〉図はコミヤマスミレと思われる。

○雀舌草一種　和名阿々也麻不斯麻（おおやまふすま）

○剝麗剝地烏謨（ふじしだ）　和漢名未詳

剝麗剝地烏謨ハ、西洋本草家貫裘等ノ統ノ名トス。今仮ニ之ヲ用フ。

〈注〉フジシダは、由布岳の北岳（飯盛山付近）一帯の岩場に生育している。Polypodium は、シダ植物エゾデンダ属の属名。

○瓦刺斯　和漢名未詳（こいわかんすげ）

瓦刺斯ハ、西洋本草家ノ芒、菅、薹等ノ統ノ名トス。今仮ニ之ヲ用フ。

〈注〉図は、山頂の岩場に生えるコイワカンスゲのようである。

○翻白草　和名伏苓草（いわきんばい）　方ニ醫有リ。所謂ル三葉ノ者、石間ニ生エル。

〈注〉図は、山頂帯の岩場に生えるイワキンバイ。

○山躑躅　和名也末都々地（みやまきりしま）

極メテ短矮ニシテ、石上ニ生エル者ハ、花ノ深紅・浅紅ノ二種有リ。

〈注〉図及び形状の解説から山頂帯に群生するミヤマキリシマ。ミヤマキリシマ Rhododendron kiusianum Makino は、牧野富太郎が大正三年（一九一四）に発表した。

○胡都苦抜涅（こつくばねうつぎ）　漢名未詳　矮生ノ者。

○天女花　和名阿々也末連花（おおやまれんげ）　方ニ醫有リ。

図　余輩、京師ニ在シ日、洛東岡崎ノ千葉安芸守幸胤ガ宅ニ於テ、一枝ヲ瓶中ニ挿スヲ観ル。因テ想像シ之ヲ写ス。蓋シ点茶家ノ者ハ、甚ダ之ヲ重ンジ、一枝ノ価直ハ一方金ナリ。幸胤ハ草翁ト号シ、以テ種芸ノ奇士ト聞クナリ。

○木密地一種（こはうちわかえで）　和漢名未詳

葉ハ明月木密地ニ相似ルモノ。

〈注〉図はコハウチワカエデ。由布岳一帯では普通にみられる。

○那々加麻度（なんきんななかまど）　漢名未詳　図　花　臨舊圖

〈注〉図はナンキンナナカマド。

○宇里納幾（うりのき）　同上　図　図　花　所蔵ノ花腊ヲ写ス。

○樹未詳名者（みやまざくら）

花、葉ハ桜桃ニ似テ、枝、幹ハ屈曲シ、古木多シ。僅カニ残花ヲ見ル。

〈注〉図及び解説はミヤマザクラ。

○草烏頭　和名也麻杜里加不杜（たんなとりかぶと）

其ノ葉ノ缺刻ハ甚ダ深ク且ツ多シ。

〈注〉図はタンナトリカブト。由布岳ではヤマトリカブトは産しない。

○梫木　和名阿設昆（あせび）　図　花　臨舊圖

○綟木　和名加失阿失密（ねじき）　短矮ノ者。　図　花　臨舊圖

○山茶科　和名利□布（りょうぶ）

○萬壽竹一種　萬壽竹　和名寶鐸草（ほうちゃくそう）　小サキ者。方ニ花有リ。

○沃都抜謨屈羅一種（くるまむぐら）　漢名未詳　五葉ノ者。方ニ花有リ。

〈注〉図はアカネ科のクルマムグラ。

○渓蓀一種　和名胡加幾都抜多（えひめあやめ）

葉極ク小サキ者。俗ニ謂フ所ノ豊杜若。　図　一名豊杜若

〈注〉図はエヒメアヤメ。コカキツバタは豊後の植物名方言。

○苦魯木地（けくろもじ）　漢名不詳

〈注〉図はケクロモジ（オオバケクロモジ）。由布岳には別にウスゲクロモジがある。

○三椏烏薬　和名烏昆抜奈（だんこうばい）

○天人草（おおまるばのてんにんそう）　漢名未詳

○密也末志倔列（やましぐれ）　漢名未詳

密也末志倔列ハ、深山ノ急雨ノ義ナリ。蓋シ、加茂神ノ祝、雨

ヲ山中ニ避ケテ始メテ之ヲ得ル。故ニ名ヅク。世人ノ争ヒテ之ヲ植エル。蘭山先生ノ没後ニ在リト云フ。

○鳲鳩　和名葛哥杜里（かっこう）図　伊藤氏ニ贈ル所ノ雛図ニ臨ス。

○加失杜里　漢名未詳

〈注〉図は欠落している。

○蜂　和名波知

「絶頂草木圖」(40)

賀来佐之
弟飛霞　同撰(41)

油布嶽採薬記巻一終

（表紙）　油布嶽採薬図譜　坤

七十八翁錦窠題簽

油布嶽採薬記巻二

山腹部

○石龍胆（ふでりんどう）
○比護尼多（きおん）
○不苦阿々草（ふくおうそう）
○多加刺哥（おたからこう）
○翻白草（いわきんばい）
○胡都苦抜湼（こつくばねうつぎ）
○山躑躅（みやまきりしま）
○木密地類（こはうちわかえで）
○細葉也麻勃苦知（ほくちあざみ）
○粉條児菜（つくししょうじょうばかま）
○納吉蘭（のぎらん）
○菴藺（ひろはやまよもぎ）

葉ハ薄ク深緑、背ハ白色ニシテ淡シ。

○那々加麻度（なんきんななかまど）
○邪蒿一種（つくしぜり）
○捋木（あせび）
○綟木（ねじき）
○艾（よもぎ）
○雀舌一種（おおやまふすま）
○微（ぜんまい）

右十有九種ハ絶頂部ニ見ル。

○翻白草　和名茯苓草（つちぐり）　方ニ花有リ。
○及己　和名不多里失雪加（ふたりしずか）　方ニ花有リ。
○参拕草（かいじんどう）　漢名未詳　方ニ花有リ。
○波児納阿密那墨失（かのこそう）　漢名未詳　方ニ花有リ。図　一名　纈草
○菫々菜一種　和名幾那斯密列（きすみれ）図　花　臨舊圖
○草烏頭　和名也麻杜里加不杜（たんなとりかぶと）
○獨活　和名支々宇度（ししうど）　方言　支地加
○羊婆乳　和名也麻□支（やまぼうし）　方ニ花有リ。
○毛芩　和名金鳳花（うまのあしがた）
○沙参　和名釣鐘人参（さいようしゃじん）図　花　臨舊圖
○紫草　和名謨羅撒幾（むらさき）　方ニ花有リ。
○鳲鳩（かっこう）　絶頂部ニ見ル。

「山腹草木圖」(42)

油布嶽採薬記巻二終

油布嶽採薬記巻三

山麓部

○多加刺哥（おたからこう）
○石龍胆（はるりんどう）
○胡都苦抜揑（こつくばねうつぎ）
○山躑躅（みやまきりしま）
○邪蒿一種（つくしぜり）
○粉條児菜（つくししょうじょうばかま）
○草烏頭（たんなとりかぶと）
○艾（よもぎ）
○梫木（あせび）
○綟木（ねじき）
○微（ぜんまい）
○納吉蘭（のぎらん）
○細葉也麻勃屈知（ほくちあざみ）
右十有三種ハ絶頂乃ビ山腹部ニ見ル。
○及己（ふたりしずか）
○沙参（さいようしゃじん）
○菫々菜一種（きすみれ）
○波児納阿密那墨失（かのこそう）
○獨活（ししうど）
右五種ハ山腹部ニ見ル。

○苦魯木地（けくろもじ）
○三椏烏薬（だんこうばい）
右二種ハ絶頂部ニ見ル。
○括蔞一種　和名宇支熬里（もみじからすうり）図　花　臨舊圖
〈注〉図はモミジカラスウリ。
○楊櫨　和名多泥宇都吉（つくしやぶうつぎ）　方ニ花有リ。
○菊葉山草薢　和名杜胡魯（かえでどころ）　方言幾杜胡魯
〈注〉図はカエデドコロ。由布岳ではキクバドコロが普通である。
○川草薢　和名杜胡魯（たちどころ）　方ニ花有リ。
○也麻垤末利（やぶでまり）　漢名未詳　方ニ花有リ。図　実　嘗テ見タ所ノモノヲ想像シテ之ヲ写ス。
○大葉櫟　和名江戸加支哇（かしわ）
〈注〉図はカシワ。
○山蘿蔔　和名末都謨支草（まつむしそう）図　花　臨舊圖
○納瓦刺末都（あきからまつ）　漢名未詳　葉ハ少ナクシテ長ク、葉脈ノ粗大ナル者。
○雁足（いぬがんそく）　漢名未詳　図　実　想像シテ之ヲ写ス。
〈注〉図はイヌガンソク。
○墨納加納胡草（つるかのこそう）　漢名未詳　方ニ花有リ。
○土當帰　和名宇杜（うど）
○大呉風草　和名樊噲草（はんかいそう）
○赤楊　和名波利納幾（やしゃぶし）
〈注〉図はヤシャブシ。
○豌豆草（いたちささげ）　漢名未詳
○麻々胡那（つしままこな）　漢名未詳　図　花　臨舊圖
○加納都墨草（ひかげみつば）　漢名未詳　図　花　臨舊圖
○多謨羅草（たむらそう）　漢名未詳　図　花　臨舊圖

○比墨比護多伊（のぶき）　漢名未詳
（ヒメヒゴタイの図に、次の記載が添付されている）
和名　ギヤウジヤブキ　ノブキ　コマノツメ　ウシクサ　〃伊圭〃
の印　ヒメヒゴタイ同名アリ　尾
漢名　古説和尚菜ニ充ツ穏ナラズ。
洋名　Adenocaulon Adhares Cens Max.
第十九綱第四目　菊科
形状
産地　城州美船　熊野　八鬼山　大和多武峰　濃州　又木曽
採
○加失哇波掘麻（かしわばはぐま）　漢名未詳　図　図　花　臨舊圖
○撤苦羅草（さくらそう）　漢名未詳　図　花　臨舊圖
○密也末波々所（みやまはは そ）　漢名未詳　図　実　臨舊圖
○大薊　和名阿尼亜□密（ひめやまあざみ）　図　花　臨舊圖
〈注〉図はヒメヤマアザミ。
○剪秋羅一種　和名也末弗失（ふしぐろせんのう）　図　花　臨舊圖
〈注〉図はフシグロセンノウ。
○単州漏慮　和名比護多伊（ひごたい）
〈注〉図の花は、臨旧図と思われる。
○鳳仙花屬　和名法螺介草（つりふねそう）　図　花　臨舊圖
○側金盞花　和名福壽草（ふくじゅそう）　図　花　臨舊圖
○胡菫草　叡山斯密例（えいざんすみれ）
○兎児酸　和名也不例瓦撤（やぶれがさ）　図　花　臨舊圖
○天南星（まむしぐさ）　和漢通名　方ニ花有リ。
〈注〉由布岳付近では、ツクシマムシグサが多い。
○名未詳草（きすげ）　葉ハ萱草ニ似テ草柔ク、根ハ靱ク知母ニ似ル。図　同前　根
〈注〉図は葉と根の二図。根は膨れないで横の皺が描かれている。キスゲ（ユウスゲ）と思われる。
○知護由里（ちごゆり）　漢名未詳
○鴉葱　和名失刺伊杜（しらいとそう）　方ニ花有リ。
○蓍草　和名納胡逆里草（あそのこぎりそう）
〈注〉由布岳一帯に自生するものはアソノコギリソウ。
○柞　和名伊奴津結（いぬつげ）
○粘魚鬚　和名也末何首烏（やまかしゅう）
○杜鵑　和名蒲杜々結斯（ほととぎす）　図　杵築藩大原氏ニ贈ル所ノ図ヲ臨ス。
○鳲鳩
右一種絶頂及ビ山腹部ニ見ル。

「山麓草木圖」(43)

睦之図ク　印（大神）　印（睦之）

油布嶽採薬記巻三　大尾

注

(1) 『図譜』の写真は、今回、安心院町教育委員会の許可を得て撮影し、掲載したものである。草木写生図については、紙数の都合で一部割愛した。

(2) 原文では、次の行に「紀行」という小題が見えるが、帆足万里のものと推測される削除の朱筆が加えられているので、これを削った。本稿では、以下全てこの朱筆を生かして書き下した。なお、改行は、筆者が内容を吟味して適宜行った。

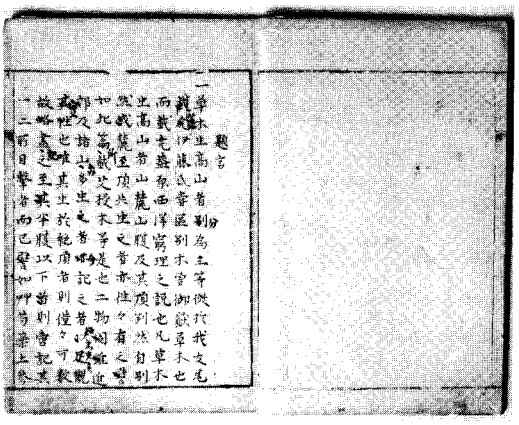
(3) 英彦山

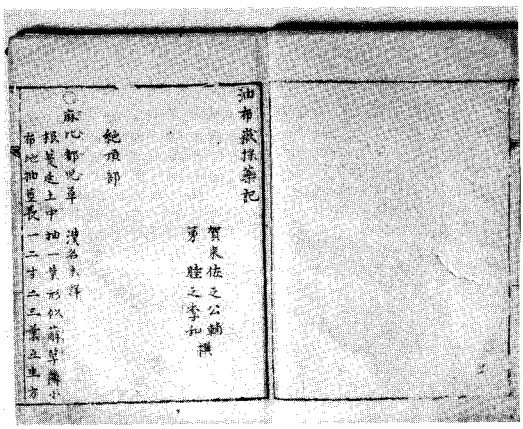
(4) 由布岳

(5) 陰暦三月三日

(6) 陰暦五月五日
(7) 陰暦五月
(8) 葛城厳哉（佐田村の医者）
(9) 塚原温泉
(10) 塚原
(11) ホトトギス
(12) 塚原道
(13) 大クエ
(14) 鶴見岳
(15) 高崎山
(16) 西岳（一五〇〇メートル）
(17) 東岳（一五八三メートル）
(18) 湯布院（由布院盆地）
(19) 日野鼎哉（医者）
(20) 飯盛山一帯
(21) 池代ノ杉
(22) 池代
(23) ショウブ
(24) ミヤマキリシマ
(25) バイケイソウ
(26) オタカラコウ
(27) ニシノヤマタイミンガサ
(28) カッコウ
(29) カケス
(30) 導者をさす
(31) 伊藤圭介
(32) 圭介の老年の号
(33) ヨモギ
(34) アセビ
(35) ヤマシャクヤク
(36) トチバニンジン
(37) 『油布嶽採薬記』の植物名に付した（ ）内の和名は、傍書された形状や写生図、さらに現在の由布岳の植物相などから、筆者が判断し注記した。
(38) 飛霞が記した和名と異なるものについては、〈注〉において補説した。
(39) 『図譜』では、植物目録と草木写生図とが別に掲げられている。本稿では、植物目録と重複する写生図中の漢名・和名は省略し、目録にないもののみ、図 と表記した後に記した。
(40) 四十九図が掲載されている。
(41) 別の紙に書かれ貼られている。筆は飛霞のもののようである。
(42) 十三図が掲載されている。
(43) 三十九図が掲載されている。

〈編集者註：本稿は、公開講座「地域文化論」において「賀来飛霞と本草学」（平成六年六月二九日）と題しておこなわれた講演に基づくものです。〉





油布藏採藥記

賀東佐之公編撰

男　駿之季和撰

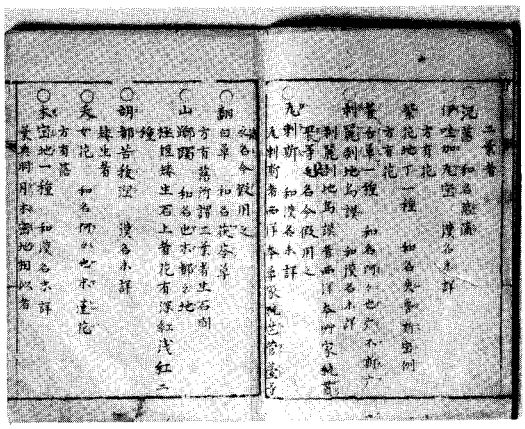
絶頂部

○麻比都比草　漢名未詳

根長達上中抽一莖形似蒲芽無小布地抽莖長一二寸二三葉互生方

所藏花瓣者或有模倣而画之者皆言

駿之識



○胡日草　和名茯苓草

方有落所謂三柔者生石間

○山鄰陽　和名也不都ゑ地

根莖株生石上者花有深紅茂紅二種

○胡都苦枝望　漢名未詳

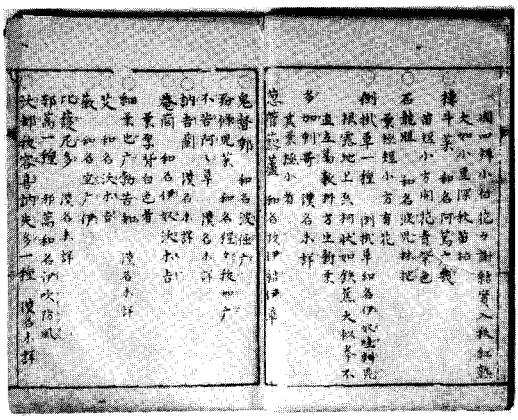
株生者

○天竺　和名阿ゑ比不都比花

方有落

○天宮地一種　和漢名未詳

黄赤明月和都地阿比者



○鬼督都　和名波佐ゑ

形神兒茶　和名俗ゑ枝ゑ比ゑ

不苦阿ゑ草　漢名未詳

○訥都蘭　和名伊比ゑ比ゑ

葉厚白色者　漢名未詳

○蓋蘭　和名伊比ゑ比ゑ

葉厚白色者　漢名未詳

○艾　和名之ゑ比ゑ

○蔵比多　漢名未詳

形高和名阿ゑ比ゑ

○夫都枝密島之夫多一種　漢名未詳

○周比羅小　和名花ゑ蘇賀人枝紅熟

文和小豆厚枝苗和名阿ゑ之ゑ

○樣平素　和名阿ゑ之ゑ

花黄色　漢名未詳

○倒抓草一種　漢名未詳

根如四鉄蒸大枝等不直立葉地上無刺抓如鉄蒸大枝等不刺抓草和名伊比ゑ比ゑ

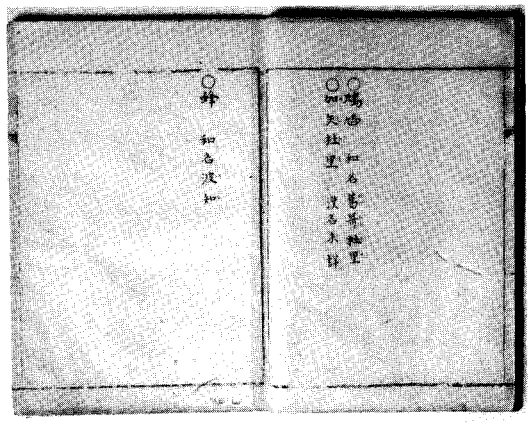
○石龍蹤　和名波比ゑ林比

○黄根蹤　漢名未詳

○多加刺哥　漢名未詳

葉根小方有花

○怠管比護　和名枝伊都ゑ草



○蔵　和名波ゑ

○伊比加比　漢名未詳

○比密　漢名未詳

○蓉　方有花地下一種　和名ゑ多ゑ蘇密阿

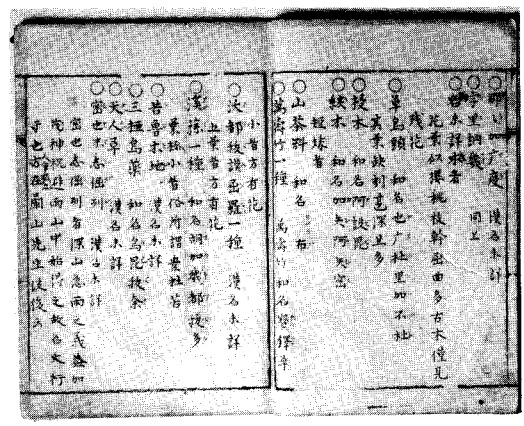
○蓉　方有花一種　和名阿ゑ比ゑ不都ゑ

○刺覽　刺地島謀　和名阿ゑ比ゑ

○刺覽　刺地島謀　和名阿ゑ比ゑ

○九刺斯　和名今夜用之

○九刺斯　和名今夜用之



○波佐　小者方有花

○夫都枝密島之一種　漢名未詳

○彩　葉有一種　和名阿ゑ都ゑ枝多

○苦魯木地　漢名未詳

○三種島葉　和名島比枝多

○天人草　漢名未詳

○密也木　漢名未詳

○明比ゑ廣　漢名未詳

○李里阿多　和名阿ゑ之ゑ

○梓　木拜林者　和名阿ゑ之ゑ

花黄紅根根幹密曲多古木僅見

○草島頭　和名也ゑ杜里阿ゑ杜

葉葉枝刺連深里多

○枝木　和名阿ゑ比ゑ密

○鉄木　和名阿ゑ比ゑ密

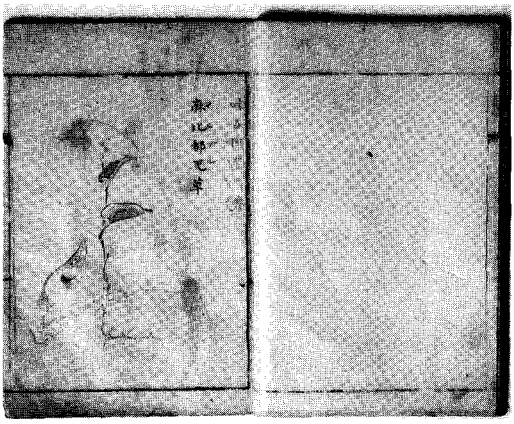
○山茶拜　和名ゑ布

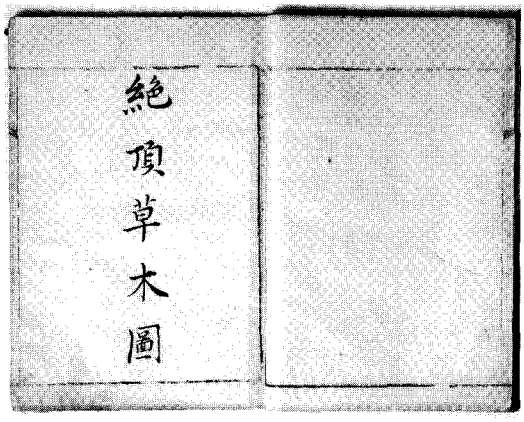
○萬年竹一種　高竹和名伊ゑ

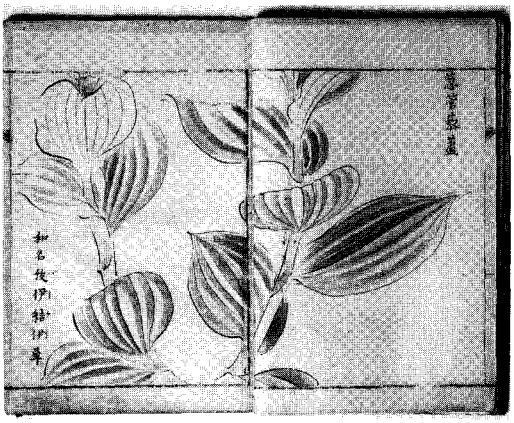
○蜂　和名波ゑ

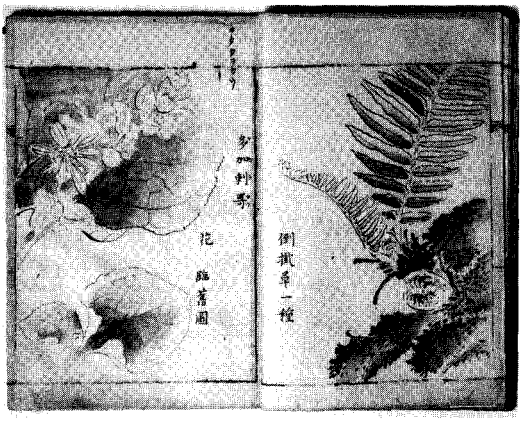
○鳴海　和名多ゑ杜里

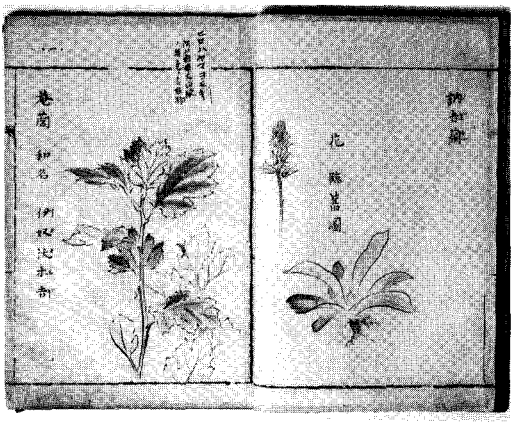
○矢杜里　漢名未詳

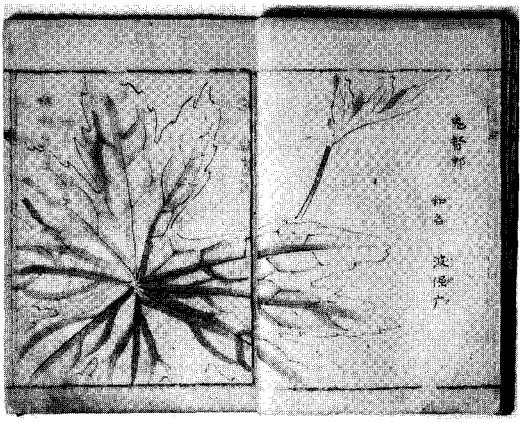


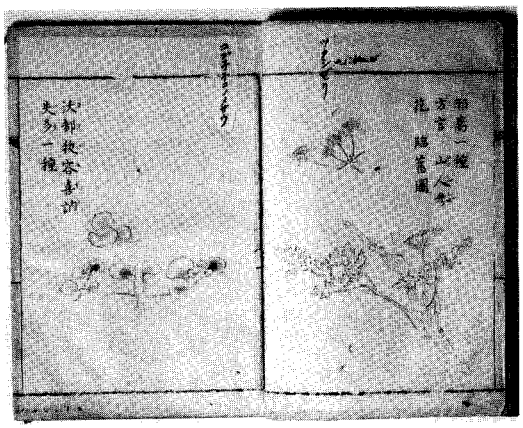

絶頂草木圖

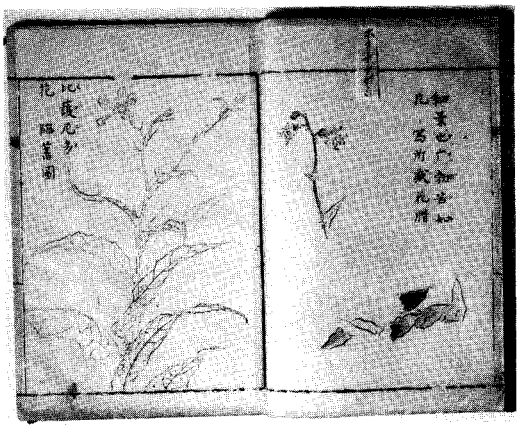


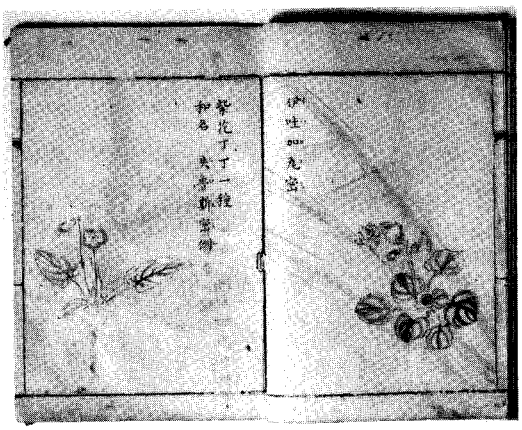


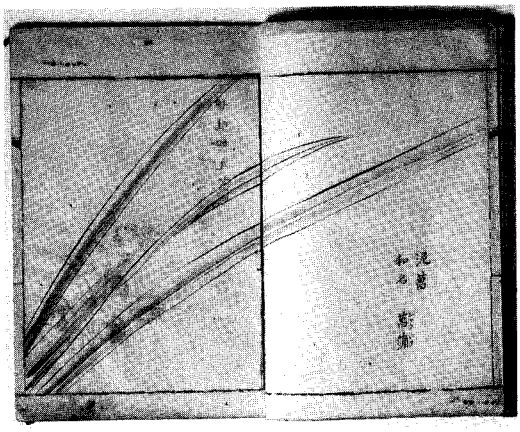


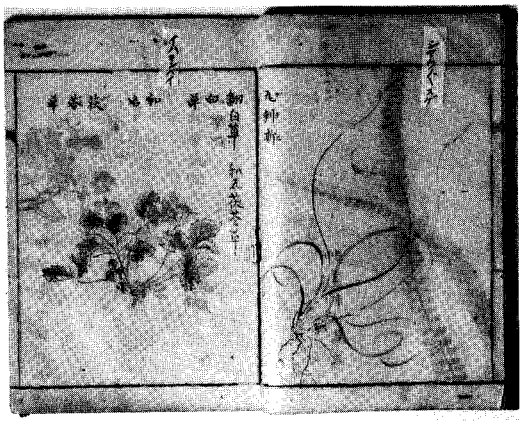


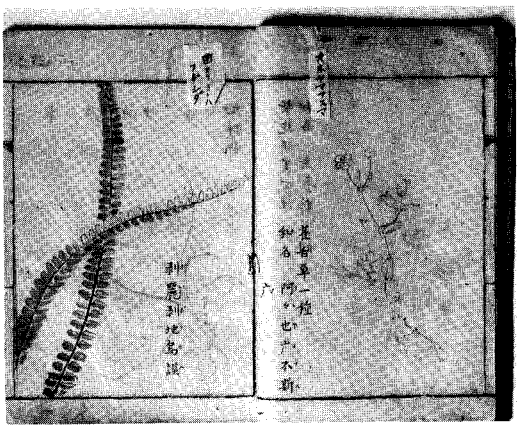


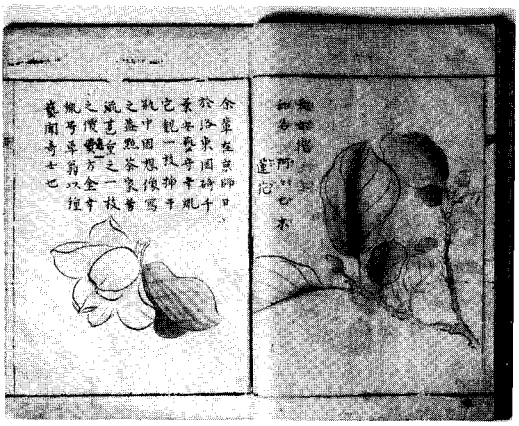


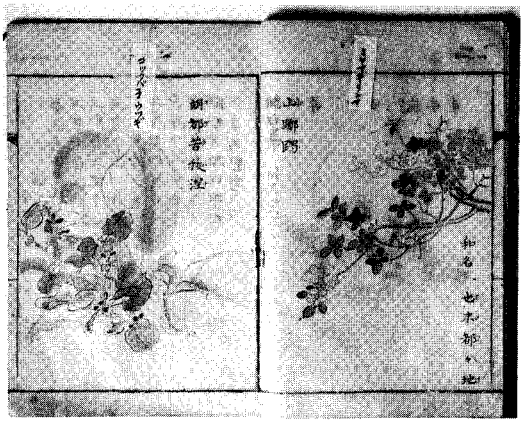


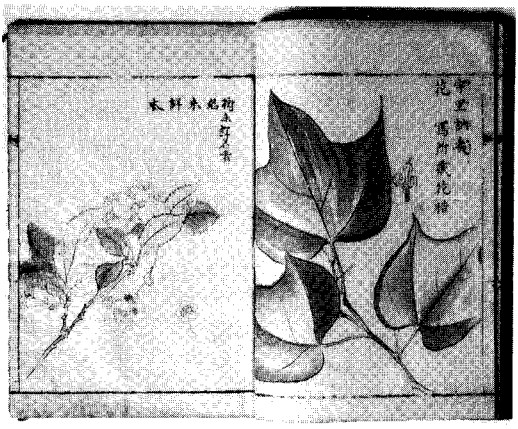


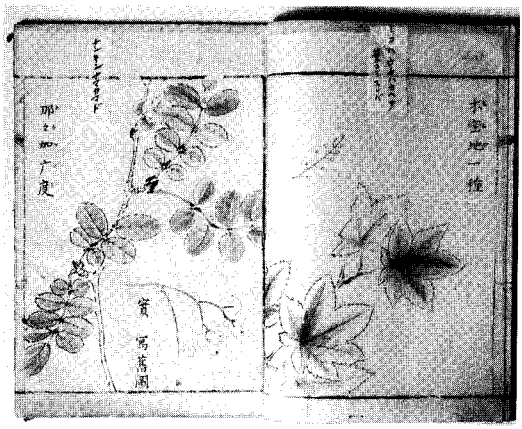


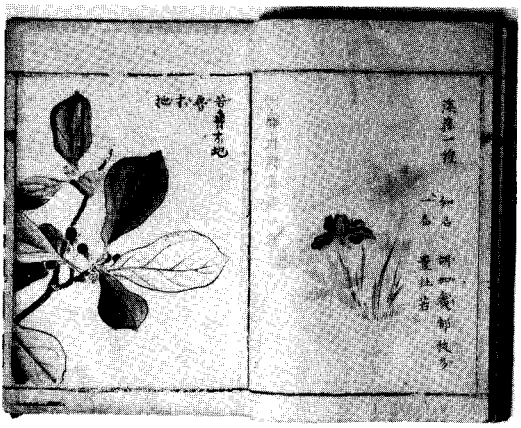


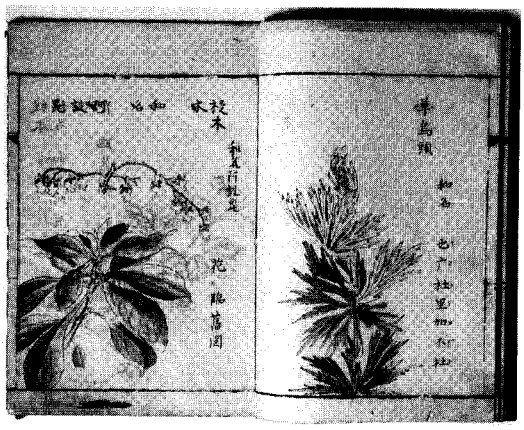


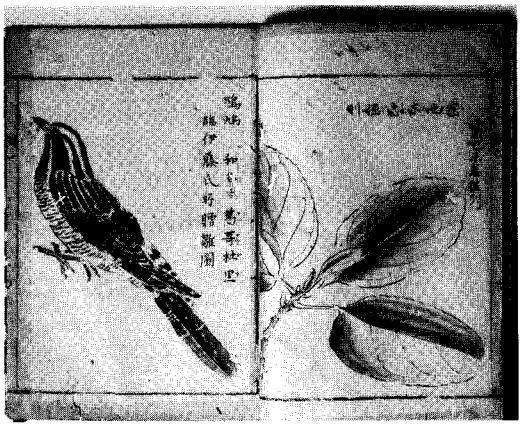


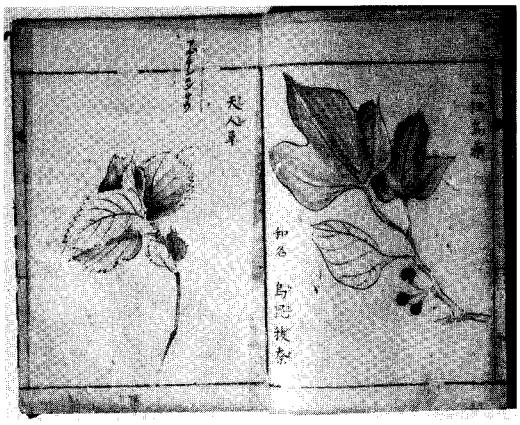


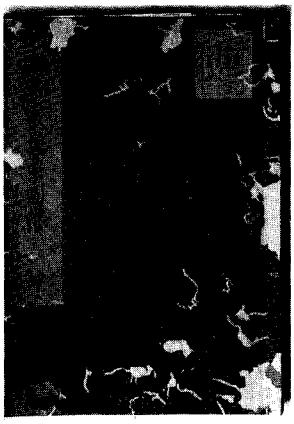


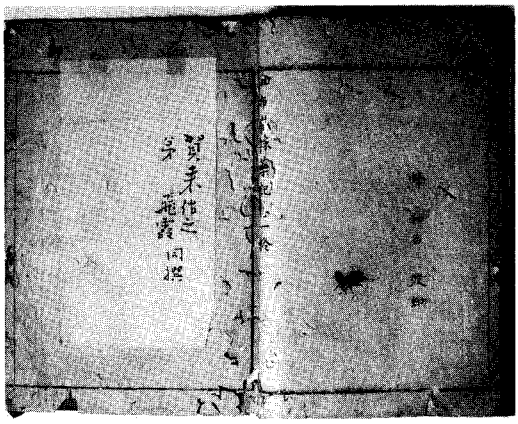


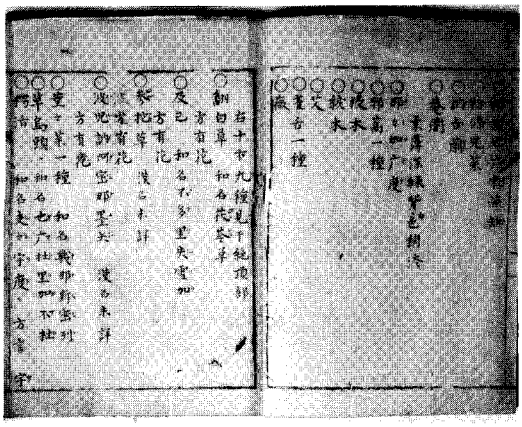


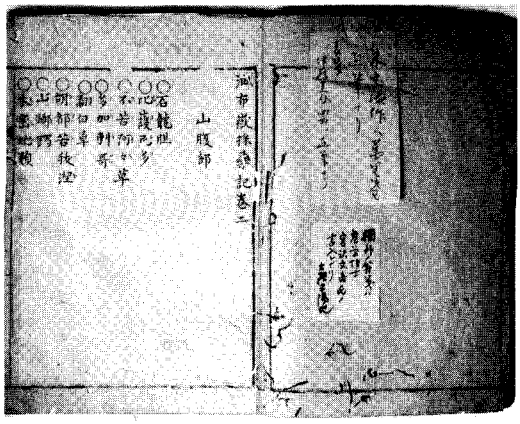


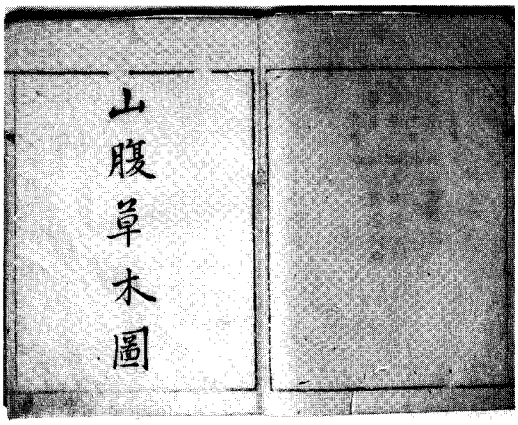


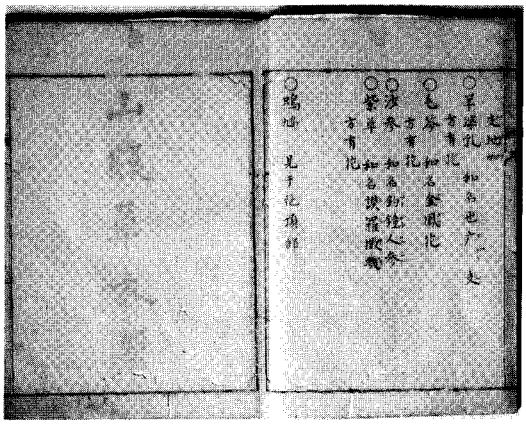


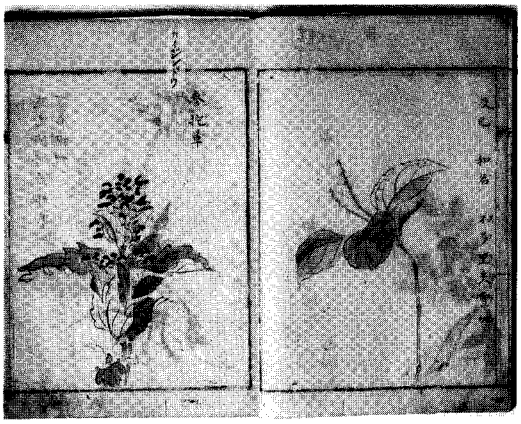


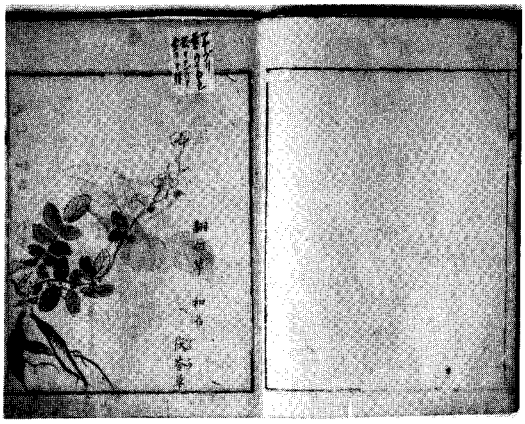


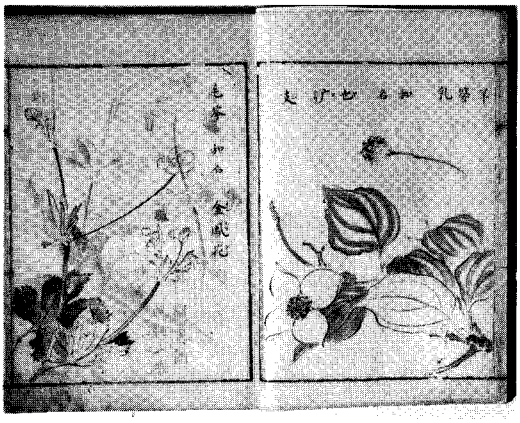


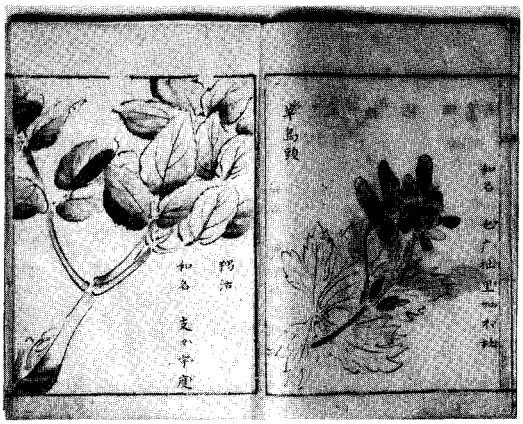

山腹草木圖

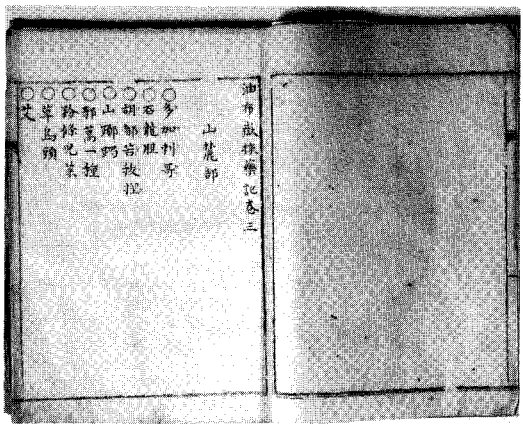


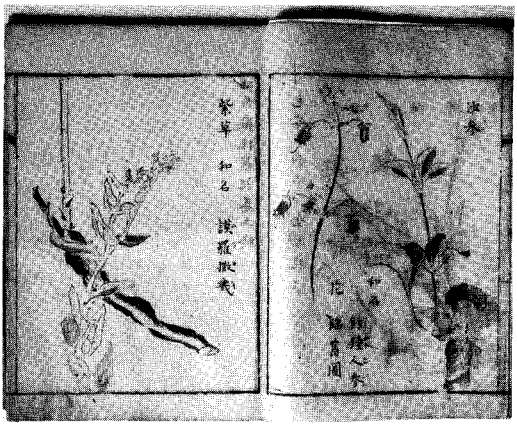


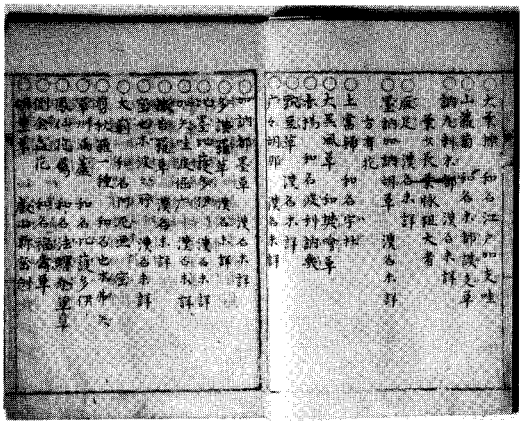


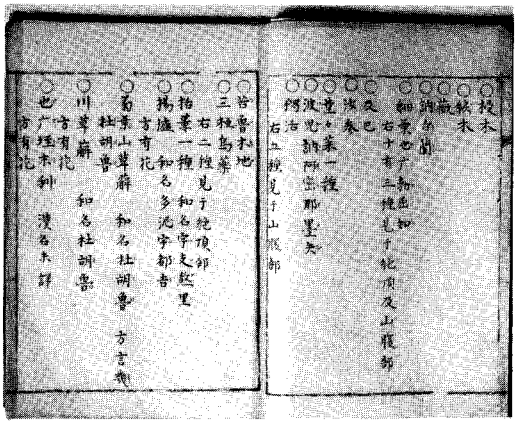


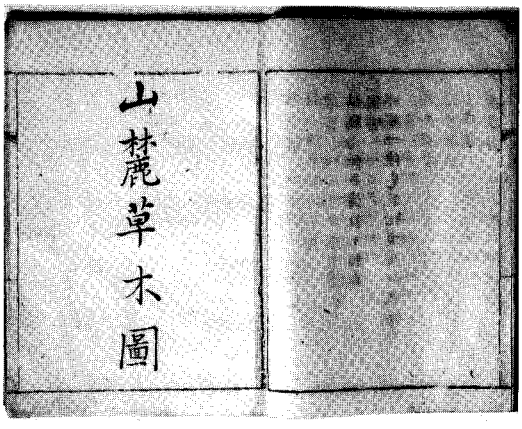


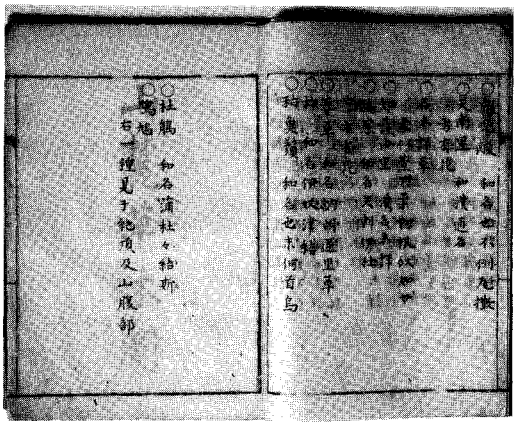

油布紙採藥記卷三
山麓部

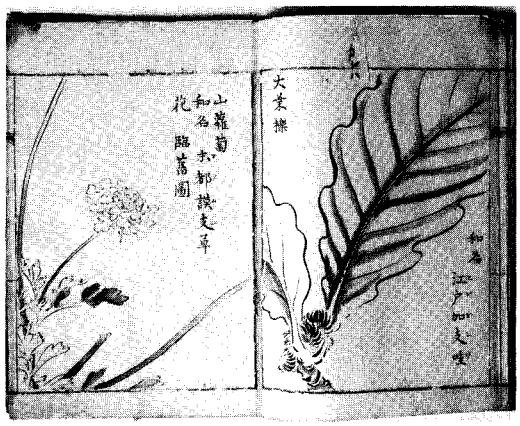

波參
和名
花綵畫圖
紫草 和名 紫根草

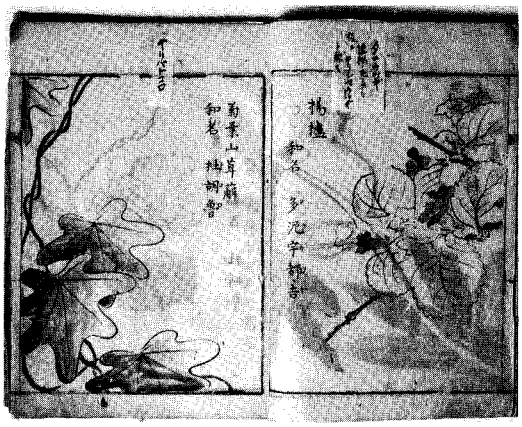




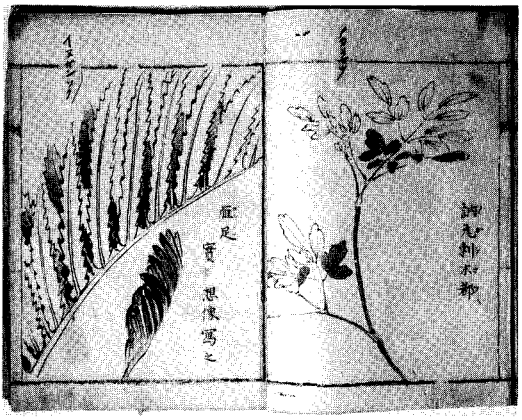

山麓草木圖

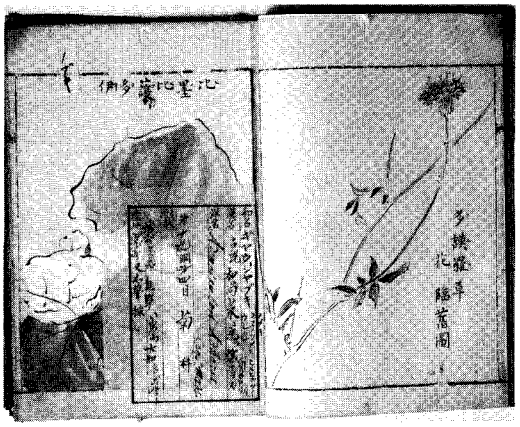


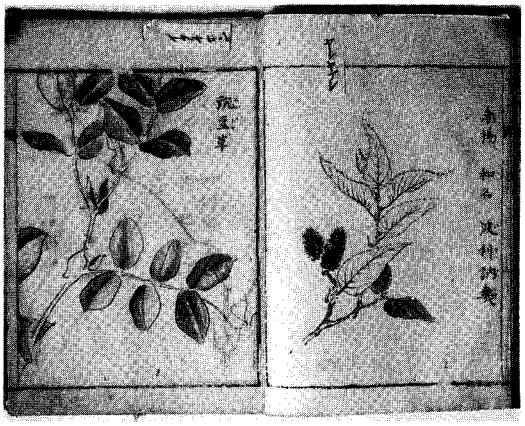

山蘿蔔
和名 ホトトギス
花 臨菖圖
大素撰
和名 江戸細辛

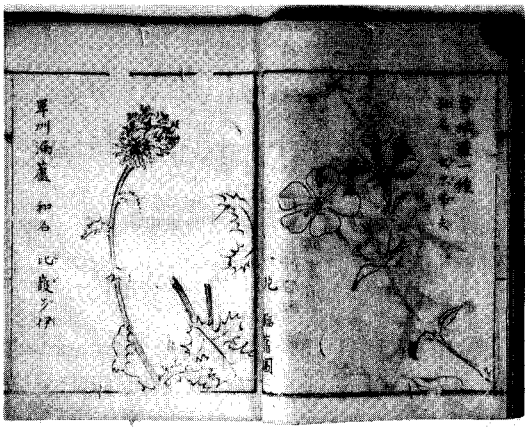

蔔葉山草蘭
和名 梅柳草
楊櫨
和名 多況字柳草

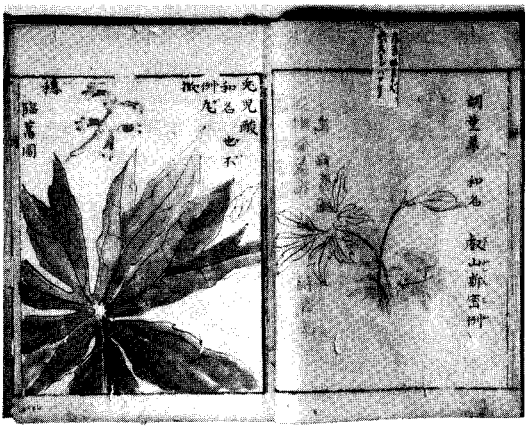
大黄風草
和名 奥管草

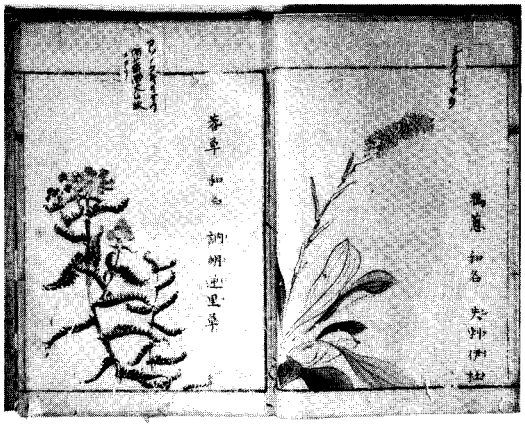

雁足實 思像寫之


多樊藿草
花臨菖圖


瑞蓮草
和名 沈柳草







Study of YUFUDAKE SAIYAKUZUFU I & II (drawing of the field work investigation in Mt. Yufu) by Kaku Hika

Masanori ARAKANE

I tried deciphering the draft, YUFUDAKE SAIYAKUKI (油布嶽採薬記) (account of the field work investigation in Mt. Yufu) and the accomplished books, YUFUDAKE SAIYAKUZUFU (油布嶽採薬図譜) written by Kaku Hika (賀来飛霞) when he climbed Mt. Yufu to investigate in 1840 (Tenpo (天保) 11). I also examined the content of these books.

YUFUDAKE SAIYAKUZUFU is considered to be academically of great value in that the identification of the plants is accurate, the ecological distribution is neatly pigeonholed according to the top part, the middle part and the foot part of the mountain and it is a flora of Mt. Yufu in Bungo (豊後) Province with the sketches of plants.